

体験博物館 千葉県立房総のむら館報

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりを、当時の環境の中で、直接体験することができます。

開館時間 9:00 ~ 16:30
休館日 月曜日（休日の場合は開館し、翌日休館）
年末年始（2025 年 12 月 26 日 ~
2026 年 1 月 2 日）
臨時休館日 2025 年 5 月 1 日、
2026 年 1 月 6 日、2 月 3 日
入場料 一般300 (240) 円 高大学生150 (120) 円
※中学生以下と 65 歳以上無料
※障害者手帳をお持ちの方と介護者 1 名無料

瓦 版 大 木 戸

Kawaraban OKIDO
Vol. 74

2025 年（令和 7 年）3 月 31 日

編集・発行
千葉県立房総のむら指定管理者
公益財団法人千葉県教育振興財団房総のむら
〒270-1506 千葉県印旛郡栄町龍角寺 1028
TEL. 0476-95-3333
<https://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>

トピックス展

「房総の牧」

房総地域では古代から近世にかけて馬の生産牧場が設置されており、近世の中ごろからは酪農が、明治期になると牧羊が行われるようになるなど、その姿や役割を変化させていきました。しかし、現在では近世から近代にみられた大規模な牧場は残っておらず、野馬土手などの遺構や、絵図・写真としてその姿を残すのみとなっています。本展覧会では、そのような牧の移り変わりの様子や管理に関わった人々に焦点を当て、当時の資料や道具・写真を用いて、「房総の牧」を紹介しています。

展示は時代ごとに章が分かれており、それぞれ「第1章 古代の牧」「第2章 近世の牧」「第3章 近代の牧」「第4章 現在の牧」としてまとめました。

日本における馬の飼養は4〜5世紀ごろから始まり、奈良時代には全国の主要官道の駅に配置する駅馬を育てるための牧が設けられました。房総地域にも7つの馬牧が設置され、下総国に設置された牧では、伊勢神宮の祭祀に供する馬の飼養もしていたようです。展示スペースには近隣の龍角寺古墳群の古墳から出土した馬形埴輪を展示しました。

江戸時代に入ると幕府は、馬の安定的な確保のため、千葉県内に幕府直轄の牧として小金牧、佐倉牧、嶺岡牧の三つの牧を設置しました。それぞれの牧では、地元の有

力な農民から選ばれた人々が牧士となり、馬や牧の管理にあたりました。牧士は、年に一度行われた、牧内の馬をすべて集める「野馬捕り」という行事の差配も担っており、展示スペースにはその際使用された焼印などの道具や、その時の様子を描いた絵図等を展示しました。



牧士の野羽織
(富里市教育委員会蔵)

馬の育成を主に行っていた房総地域の牧ですが、享保期には嶺岡牧において白牛（乳牛）の飼育が始まり、明治期になると有志の人々によって畜産会社が設立され、酪農に力を入れるようになりました。嶺岡牧での酪農は、管理者や形態を変えながら、大正期には最盛期を迎えました。

一方、北総地域的小金牧と佐倉牧は明治期に入ると、明治政府の方針により開墾され、佐倉牧の一部には下総牧羊場や牛馬の品種改良の場である取香種畜場が開設されました。これらは後に合併し、宮内省への所管を移したことにより下総御料牧場へ

と名称を変えました。展示スペースには牧羊場で生産された綿で作られた洋服を展示しました。

古代から近代にわたって馬・牛・羊の生産を行っていた房総地域ですが現在では開発が進み、野馬土手等の大規模な牧を形成していた遺構は、ほとんど姿を消してしまいました。第四章の「現在の牧」では、そういった野馬土手等のうち、現在でも見ることができる牧の遺構の写真を展示しました。

現在でも、観光施設としての牧場や競走馬の生産牧場などがあり、馬や牛、羊の飼育頭数も比較的多い千葉県ではありますが、かつて存在した大規模な馬牧や、酪農・牧羊などが県内で行われていたことを知っている人は少ない状況となっています。今回の展示が、地域に残る牧の遺構や歴史などに興味を持つきっかけになれば幸いです。

（商家グループ 山本）



小間子牧野馬捕込跡
(八街市郷土資料館提供)

令和7年2月22日(土)から

4月20日(日)まで

「炭焼き窯の修繕②」

前号炭焼き窯の修繕①では、炭焼き窯の天井について、粘土の固まりを乗せるところまでをご紹介しました。今回はその続きから紹介します。

粘土の固まりを並べて、亀の甲羅のような形をした天井部分の表面を伸ばしながら塊同士をくっつけます。すると表面がつるつるとしたドーム状になります。(写真①)十分乾燥する前に詰めた木に火を付けると、天井が落ちてしまいます。そのため、木の棒でひたすら叩き締めながら乾燥させます。こうすることで、中の水分が表面に出て、粘土同士がくっつきます。指導いただいた木曽野氏からも、この工程が一番大事とのこと、職員が交代で毎日叩き締めました。叩いていると、ひびが出たり、粘土がよったりするので、都度修正を行いました。

二週間後、表面が固くなり、叩くと金属を叩いた時のような音がするようになります。そうすると焚き込みという工程となります。天井部を形作するために窯の内部へ入っていた木に火を付け、天井を焼きます。ここからは炭焼きと同じ工程をたどります。しかし普段の炭焼きと異なる点は天井の上に炭を並べて、その炭にも火を付けることです。これは中と外との温度変化が大きくなると、収縮に差が出て亀裂ができてしまうからです。

こうして午前九時から翌日のお昼ごろまで、夜通し火の管理を行いながら焚き続けます。(写真②)そして窯口と煙口をふさぎ

密閉状態にする、止め窯を行いました。本来であれば四日ほどで窯が冷めるところ、今回は一週間以上熱いままでした。これは止め窯が甘く、中に空気が入り燃え続けていたからです。窯の定、窯を開けると炭は二割ほどしか残っていない状況でした。肝心の天井は、全体的に塊の下四から三分の一部分が落ちていました。これはおそらく、粘土と砂を混ぜる際に、砂の成分が多かったのではないかと考えられます。しかし天井自体に大きな亀裂はなく、また穴があくこともありませんでした。

こうして天井部が完成しました。その後、四回炭焼きを行いました。問題なく炭ができています。木曽野氏によると、この形の炭窯の天井は、もともと長く使用するものではないとのことなので、今後は定期的に作り直していきたいと考えています。その際には、ぜひご覧になっていただければと思います。

(農家グループ 高原)



写真①



写真②

「薬の実演」

薬の店では年に八回、漢方に造詣の深い薬剤師の方をお招きして、店先で漢方についてお話をしていただいています。

漢方医学の考え方は、六世紀頃に中国から伝来しました。その後、日本独自の漢方医学が発達し、中国のものと区別するため「和漢方」と呼ぶ場合もあります。

中国の漢方は中医学の中に組み込まれているものになります。

漢方の特徴として、「生薬」を使うことがあげられます。生薬とは、植物、鉱物など自然由来のものに乾燥など簡単な処理を行い薬用としたものです。

これは西洋医学を基にしている現代の医療との決定的な違いでもあります。現代医療では、人工的に作った成分を薬としますが、見方を変えれば体に無理をさせているとも言えます。

そのため、人によってはひどい副作用が出たり、アレルギー反応が出たりします。

一方、生薬は自然由来のものでできているので、すぐに病気を治すことは目的としていません。その代わり、個人に合ったものを調合するので、体にとってやさしい薬となります。

その場しのぎではなく、体を元から元気にする効果を期待して、最近では生薬が再注目されています。

また、生薬は日本人が原始から受け継ぐ呪術的な効果も持っていると考えられ

ます。

社会人類学者 ジェームズ・フレイザーは、著書『金枝篇』で世界中のあらゆる呪術をカテゴリーごとに分類しました。

その一つが「感染呪術」です。

触ったり、持ったりすることで、モノからモノへ呪いや力を伝染させるという考え方です。

生薬を選択する人の中には、ただ病気を治したいだけでなく、自然が持つ力にあやかりたいという願いを持っている人は少なくないのではないでしょうか。

気軽に漢方に触れる機会として、ぜひ一度、薬の実演日に足をお運びください。

(商家グループ 大角)



薬研体験



桂皮(シナモン)

風土記の丘資料館 「土器作り」

縄文時代の開始とほぼ同時に土器が作られるはじまりました。それ以前の人たちも粘土が熱を受けると化学変化を起こして堅くなるということはおそらく気づいていたのだと思います。さらにこれを焼き物にして調理用の器や貯蔵用の器にしようと考えた人が1万年以上前にいたということです。から、これはこれですごくいいことですね。

その土器を自分たちで作作り、野焼きという原始的な焼き方で焼き上げるところまで体験してもらうというのが、風土記の丘資料館で実施している「土器作り」という体験演目です。材料になる粘土は千葉県内で採れる普通の粘土で、土器作りに使いやすい状態にまで当館の技術員さんたちが粘土を調整し、当日は参加者の皆さんにこの粘土を使って縄文土器の写真集などを参考にしている思いの土器を作ってもらいます。中々思い通りの形にならず、かなりのところまでできていたのに気に入らずに壊して最初から作り直す、というのはいはば毎回見られるお馴染みの光景です。時には時間内で作り上げることができず家に持ち帰って焼き上げる日に持参する方もいます。

参加者の皆さんが作り上げた土器は、ひび割れなどがないように温湿度の管理をしながら館内で保管し、焼き上げの日を待ちます。焼き上げの当日は資料館脇の通称「縄文広場」で燃料の薪に火をつけて土器をその中に置き、さらに薪を足して一気に焼き上げる「野焼き」という作業を皆さ

んに見ていただきます。焼きあがった土器はかなりの高温になるため、火から取り出した後にやけどをしない温度にまで下がったところで持ち帰っていただきます。焼いている最中に、把手などの凝ったつくりの部分などがとれてしまうという悲しい光景も、やはり毎回見られるお馴染みのものです。

(風土記グループ 萩原)



焼き上げ



完成

広報・普及 「北総江戸めぐり」

館外イベント「北総江戸めぐり」が昨年十一月十日に行われました。

今年度二回目は当館職員二名と、参加者三名の総勢五名で八街市を巡りました。

八街駅に集合し、駅からほど近い「けやきの森公園」と八街市の開墾者の子孫が現在も居住する住宅の外観を視察した後、八街市郷土資料館に伺いました。

資料館では現地職員の方のご厚意で、前日まで展示を行っていた資料の一部を紹介していただきました。職員の方に質問をするなど、解説に熱心に耳を傾ける参加者の皆様の様子が印象的でした。

午後にはまず、昼食場所から五キロメートルほど離れた「根古谷城址」「法宣寺」、木々や大地の作り出す自然によつてお釈迦様が横になっているように見える「寝釈迦」がみられる根古谷地区へ向かいました。

根古谷地区はかつて周辺地区と合わせて塩古と呼ばれており、その景色は「塩古八景」と賞されていました。

法宣寺を視察後、根古谷地区を後に、「柳沢牧野馬土手」「榎戸新田梁」を見学し、集合駅であつた八街駅の隣、榎戸駅にて解散となりました。柳沢牧野馬土手は現在、小学校の敷地の一部となっております。

史跡一つ一つが離れた場所にあるため、一日かけて長時間の徒歩移動となりましたが、一同で会話や風景を楽しみながら、無事終えることができました。

道中様々な所で八街市特有の「落下ぼつ

ち」を発見するほか、通りがかつた神社を訪れたりと徒歩だからこそその出会いもありました。

寝釈迦や落下ぼつち、柳沢牧野馬土手など日常の中に溶け込んでいる魅力をよく知ることができ、職員としても大変実りのある一日を過ごせました。

今年度の北総江戸めぐりへ参加していただきました皆様と八街市郷土資料館の皆様へ、改めて感謝申し上げます。

このイベントで知られていなかった八街市の魅力に参加者の皆様へお伝えできているれば幸いです。

(広報・普及グループ 岩瀬)



寝釈迦



職員による解説の様子

商家

「緑のボランティアの活動」

緑のボランティアは、館内及び無料エリア内にある竹林や植栽を中心に環境整備や保全活動を行っています。今年度は各施設の植栽の整備や竹垣作り、生垣の剪定を行いました。

館内の有料エリアには、江戸時代末期から明治時代初期にかけての商家の街並み、武家屋敷、農家の建物と景観が再現されています。これらのエリアで、江戸時代末期から明治時代初期にかけての景観を再現する上で、生垣や竹垣なども重要な物の一つです。

今年度、緑のボランティアでは、竹垣の整備を総屋前、上総の農家の長屋門で行いました。植栽の整備を下総の農家、上総の農家、武家屋敷などで行いました。

総屋前の竹垣は元々、プラスチック製の竹垣でしたが、今年は実際の竹を使用し、「四ツ目垣」という種類の竹垣を作りました。四ツ目垣とは、竹を縦と横で組み



四ツ目垣

合わせて作った竹垣で、竹垣の隙間に四つの隙間ができることから「四ツ目垣」と呼ばれています。初めに焼いた柱を立てて、次に竹を交互に立てました。次に支えとなる長い竹を横につけて縛りました。



建仁寺垣

上総の農家では、長屋門に「建仁寺垣」という方法で竹垣を作成しました。「建仁寺垣」は京都市の古刹である建仁寺で、初めて作成されたことから「建仁寺垣」と呼ばれています。二つに割った竹を縦に隙間がないように並べ、横に支えとなる太い竹を付けて作成する竹垣です。縦に隙間なく並べることで、見た目もきれいですが、外からの目隠しや庭の仕切りなどにも使われています。

また、下総の農家の生垣の剪定や上総の農家の梅林の剪定、武家屋敷の植栽の整備、水車小屋のドウダンツツジの剪定などを行いました。

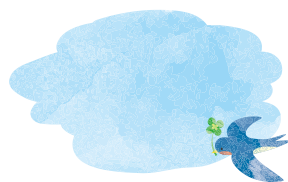
令和七年度も館内の竹垣や生垣、植栽の整備などを行う予定です。緑のボランティアの活躍にご期待ください。

(商家グループ 下村)

まつり開催時の注意事項

まつり当日は駐車場が大変混雑いたします。公共交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

また、館内はテント類の設営、ボール等の遊具の持ち込みは禁止です。まつり開催期間中は、コスプレでの撮影の予約はお受けしておりません。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



令和7年上半期のイベント

- 春のまつり
5月2日(金)～6日(火)
- 伝統文化入門
5月25日(日)・9月27日(土)
- 町並み探検隊(館外)
6月22日(日)市川市
- 房総座
6月29日(日)
- 縁日・夕涼み
8月2日(土)・3日(日)
- 展覧会「地中からのメッセージ」
9月6日(土)～10月26日(日)

※上記以外に多くの実演・体験をご用意しております。詳細は令和7年度体験のしおり、または当館ホームページをご覧ください。

◇編集後記◇

この冬は、冬の型の気圧配置が中々崩れず、房総のむらのある北総地域でも例年になく風が強く寒い日が続いておりました。

ただ、三月の声を聞くと、急速に気温が上がって春らしくなってきました。

天候が安定し気温があげれば、むらの木々も一斉に芽吹き、すてきな景観がひろがることと思います。あとちよつとだけ、首を長くしてお待ちください。

(広報・普及グループ 谷鹿)

